

いのち
生命の水 うるおす未来

アジアネット

JAFS

NEWS & REPORTS 2023年冬

152

21 22 23 24 25
26 27 28 29 30



特集

日本に住む
外国人の子に
日本語を教える



● 主な目次 ●

「巻頭言」貧困なき世界を目指して	02
特集：日本に住む外国人の子に日本語を教える——JAFSの新取り組み	04~07
日・ポ友情のウクライナ支援オークション	08~10
ウクライナ難民へ多くの皆さんから寄付	10
バングラの小学校に衛生的なトイレ建設	11
クーデターのミャンマー民主化へ連帯を	12
3本の柱でスリランカの困窮者支援	13
鉛筆とノート売って環境を保全	13
第3回日本語スピーチコンテスト	14・15
2年目のブルーオーシャン作戦	16・17
「井戸ができた村」	18~23
「JAFSプラザ」=国内の活動	24・25
音楽でネパールと日本を橋渡し／遊ぶように譜面に向かう室内楽／パダトラ小学校と生理小屋に取り組む 他	
イベントカレンダー 2023年冬	26・27
新入会員紹介・領収報告	28・29
ネパール「朝日読者の森」の20年②	30
「環境コラム」	31

巻頭言

貧困なき世界を目指して



上野 孝一
アジア協会アジア友の会 理事

アジア協会アジア友の会（JAFS）は今年で設立されて満43年になり、私自身も関わりをもって35年くらいになるかと思えます。委員会は一貫して総務・財務委員会に属し、直接プロジェクトに関わったことはほとんどありません。一緒に仕事をやらせてもらった総務委員長の村田朋昌さん（1988〜2013年）や財務委員長の川谷威郎先生（1996〜2005年）らによくお世話になり、今でもよく思い出します。多くの、またいろいろなジャンルの人々との出会いを与えてくれるところが何と云ってもJAFSの魅力のひとつです。

JAFSの基本理念である「誰もが生まれてきて良かったと思える地球社会の創造をめざし」は大変気に入っております。世界中で悲惨な生活を余儀なくされている数多くの人々、それらが我々の責任かは別にして、決して目をそむけてはならないと思っております。私にとっての原点は50年前の学生時代に、アフリカのピアラで栄養失調で死にゆく子どものテレビ画面を見ながら、下宿近くの食堂で腹一杯にジンギスカン定食を食べていた時の複雑な気持ちです。今でも時折思い出します。43年を振り返ってみて、JAFSの対象とするプロジェクトも随分と様変わりして来たように思われます。当初は井戸掘りが中心でしたが、現在は貧困対策がメインのように思われます。確かに現代社会の問題について大半は貧困から発生しているように思われます。その他環境問題、必ずやって来る緊急災害対策など課題は数多く広がっています。現在JAFSはこれら外部の課題

とは別にして、内部にも大きな課題を抱えています。総務・財務委員会でも真つ先に話題になるのが会員数と財政状況であります。会員数はここ何年も減少状態が続き、現在約1600人で最盛期の四割程度であります。財政面においても、会員数の減少に伴い会費収入が減り赤字状況が続いております。JAFSはNGOですから、もちろん収益を目的とした団体ではありませんが、正直言って財政的な裏付けがなければ何もできません。我が国もインフレ配が濃厚ですが、アジアネットの読者の皆様にも十二分にご理解を賜りたく思います。いずれにせよ、これからJAFS丸という船を航行させることは大変難しいということだけは確かだと思えます。特に日頃船を動かしている船長以下スタッフは大変かと思いますが、どんなことがあっても頑張つて欲しいと思います。今後のJAFSの命運はスタッフの頑張りに具合に掛かっています。理事である我々も一体となって協力していく覚悟です。

JAFSの全会員の皆様、アジアネットの読者の皆様、何卒チームJAFS丸の絶大なサポーターとして応援のほどよろしく願っています。貧困によって人生に失望する人が少しでもこの地球上から減ることを願い、誰もが生まれて来てよかったと思える社会作りを目指して頑張ります。

● プロフィール ●

うえの・こういち 1950年大阪玉造で生まれる。大学卒業後、ほんの少しの企業経験の後、老人福祉施設に就職し、2022年3月まで約45年勤める。1987年からJAFS理事。2006年から同財務委員長。会計担当で、理事会や総会などでの決算報告が主な仕事。

JAFS 会員綱領

私たちは、世界の平和と人間の基本的人権を守るために人々との「友情と信頼」に基づく「理解と協力と連帯」の輪をアジアと世界に広げます。

かかる目的をもって私たちJAFS会員は以下のことに努めます。

- 一、より人間らしい地球社会の創造をめざします。
- 一、アジアと世界の人々の幸せに奉仕します。
- 一、地球の自然環境を大切に守ります。
- 一、生活の無駄を省き、地球資源を大切にします。
- 一、これらの奉仕活動を通して、自分と他人の生命の価値を高めます。

以上



特集 日本に住む 外国人の子に 日本語を教える

カキ、のり、ネコ ほくらは言えた。 学ぶ顔ほほえむ

アジア協会アジア友の会（JAFSS）は、日本に住みながら日本語が不自由な外国人の子どもや、外国にルーツを持つ子どもとその家族に日本語を教える「日本語サポート」活動を始めました。当会が手掛ける外国人教育支援の取り組みの一つです。大阪市西区にある小学校では2022年6月から、数人の指導ボランティアの講師が児童と一対一で、国語の時間に特別授業で週1回、45分間の日本語指導をしています。対象児童は現在6人（パキスタン、台湾各2人、フィリピン、中国各1人）。学年も日本語のレベルもそれぞれ異なりますが、新しい言葉や単語を覚えて、日々の学校生活で使えるようになりました。言葉数も増えて、笑顔がいっぱいです。（JAFSSスタッフ 坂口優）

生徒と先生が1対1

「おはよう」
窓から日が差し込む3時限目の教室。チャイムが鳴った少し後、両手に荷物をいっぱい抱えてA君がやって来た。パキスタン出身の2年生だ。
先生役の指導ボランティア、Tさんが「おはよう」と答えて迎える。
T「礼！」

礼をして椅子に座るA君。早速、授業が始まった。Tさんが本物の柿を手にとりて見せる。
T「先週も見せたね。これは何ですか」
A「これは……」
T「これは……か……」
A「……か……かき。かきくけこ」
元氣よく「柿」と言えた。
さらにA君は、机の上に置かれた絵カードを見る。
A「これ！」
T「これは……か……」
A「……か……かき。かきくけこ」

両手の指で輪をつくって、めがねのポーズをする。
桃が描かれた絵カードを見せて、
A「もも」
T「桃はパキスタンにもある？」
A「ない」
と手を交差させてバツのポーズをしながら答える。
次にTさんは、絵カルタを取り出した。神経衰弱形式のゲームで、同じ絵カルタを引いたら、その単語を日本語

で答える。楽しみながら、勉強の難易度を少しずつ上げていくのだ。
T「これなに？」
A「に……わ……と……り」
自信なさそうに答えたA君だったが、急に「クワックワックワック」と、鶏の鳴き声をまねした。カルタがそろうと「うわあ〜〜」と、とても大きな声で喜ぶ。ゲームは最終的にA君が勝った。
A「勝った！いえ〜い」
机の上に身を乗りだし、そこからジャンプ。常に動き回っている。
授業はまだまだ終わらない。
Tさんが黒板に21から30までの数字を書き出した。それをA君が読み上げる。スラスラ言えた。
そして、授業で習った九九の練習。2の段をTさんが黒板に書き、A君が答える。これもスラスラ言えた。
急に、
A「待って、待って、待って……5×16=80」
するとTさんが、
T「8×2は？」
A「……16」
T「8×3は？」
A「……24」
少し考えながら、でも、答えることができた

次の絵カードを見せて、
A「……ネコ？」
T「そう。ネコ」
だんだんA君の落ち着きがなくなってきた。日本語で何と言うのかわからないものがあるようだ。枕の絵カードを手にとった。
T「ま・く・ら。知ってる？」
Tさんの問いかけに、A君は枕に頭を載せて寝るポーズをした。机の上にも体を横にして寝てみせた。さらに教室の黒板に枕の絵を描いた。描いた枕を使って寝るまねをした。どうやら、わかったようだ。
色々動き回りながらも机と椅子がある場所まで戻ってきた。次の絵カードを見せながら、



パズルを組み立てて動物の名前を日本語で当てるゲームもある

「ナイ」はパキスタンの言葉で「いえ」という意味だ。ついつい「いえ」の代わりに「ナイ」で答えてしま

うA君。

最後は折り紙を使って指導。

犬の形に折られた折り紙を見せて、

T「これは何ですか」

A「いぬ」

他にも折られた折り紙に気をとられ、

バックンの形の折り紙を手に取り、

A「これなに？」

T「バックンチョ」

手に取ったバックンチョで自分の鼻や

指を挟みだすA君。

T「犬を折るよ。何色がいい？」

A「あお」

先生とA君が一緒に犬を折る。完成し

た犬に目と口を黙々と描くA君。する

と、

A「先生、待って」

A君がピンクの折り紙を手に取り、

絵を描き始める。この日一番の集中力

で、黙々と折り紙にキリンの絵を描き

だした。次に木、太陽、雲、滝、ライ

オンも描いていく。

描き終わったタイミングで、授業時

間の終了を告げるチャイムが鳴った。

描いた絵は先生にあげた。

T「終わるよー。起立」

椅子の上立つA君。

T「はい、降りて。礼」

礼をして授業は終了。Aくんは手を

振って教室に帰って行った。

一所懸命な子ども。好きなことや興

味があることには、集中力が途切れな

い。学校以外で日本語を使う機会が少

ないと、勉強したことなかなか覚え

られないが、友達との遊びや会話で単

語は増えている。

教え方をボランティアも一緒に becoming 学ぶ

子どもたちに毎週、何かしら成長が
みられる様子は、指導に携わっている
ボランティアの皆さんの励みにもなっ
ている。さまざまなやり方で、そして
楽しみながら日本語を学習できるよう
に、45分間の授業の中で工夫を凝らし
ながら日本語サポートをしている。

その一人が、東由里絵さんだ。
日本語教師になるために、420時
間の教師養成講座コースを受講した。
その後、日本語教師の仕事を探した
が、当時はコロナの影響で留学生の数
も少なく、就職がとて難しかった。

で参加を決めたという。
まず初めに、担当する子が学校で実
際に授業を受けている様子を見学に行
った。まだ日本語をあまり理解してお
らず、授業に戸惑っている様子だった
。少しでも「分かった!」と思って
ほしい、そしてそれが喜びになり、日
本語をもっと学びたいと思つてほし
い、と強く思った。

も向け英会話教室
のアシスタントと
して働き始めた。
それまで子どもの
教育に携わる仕事
をしたことがなか
ったため、とても
苦戦していた。そ
のときにこの活動
を紹介してもらっ
た。この活動を通
じて経験を積み、
日本語教師の仕事
に生かしたい、そ
して養成講座で学
んだことを生かし
たい、ということ
が、一人一人に合った対応ができま
す。そのようなサポートが求められて
いることと、継続してサポートする必
要性を、実際に子どもたちに教えてみ
て、より強く感じました」

スマートフォンを使ってできる仲間外れクイズで日本語を
学ぶ、フィリピン出身のB君(左)



1回目に、その子の好きなキャラクタ
ーを聞いた。次回からは、そのキャラ
クターの画像を使って、興味を引くよ
うにした。キャラクターを見つけた
ら、とてもうれしそうに、画面をしつ
かりと見てくれた。

課題であったカタカナとは何か?を
繰り返し何度も教えた。カタカナとは
何かを説明した際に、その子が「あ
〜!」と言って理解した反応を示して
くれたときは、とてもうれしかった。

職場である英会話教室では、子ども
は飽きやすいこと、授業の中にゲーム
を取り入れるといい、ということを受
取った。小学校の授業でも取り入れた。
担当した子は、「私とどっちがたくさ
んカタカナが書けるか?」というゲー
ムがとても好きで、たくさん文字を書
いてくれた。

初めのうちは、早く数多く書きたい
ので難に書いてしまうことがあった。
そんなときは、「この文字は読めませ
ん」「この文字は数えません」と厳し
く突き放し、読み方をあえて数えなか
った。すると、次からしつかりと書い
てくれるようになった。ゲームを通じ
て、たくさんのおもしろく学んでく
れた。

以前は「さようなら」が言えず、
「バイバイ」と言っていたのが、「さ
ようなら」を教え、授業後に「さよう
なら」と言ってくれたときは、とても
うれしかった。

「この授業を通じて、子どもに授業
中に聞いていたことを少しでも分かっ
てもらえ、もっと知りたいと思つても
らえるように活動してきました。私の
この活動がそのきっかけになってくれ
たらいいなと思つています」と話す。

同じく日本語学習ボランティアの川
端勝さんは、日本で暮らす外国人とそ
の家族が抱える言葉の悩みについて、
次のように指摘する。

「技能実習生を含めて、在留外国人
労働者の数が、近年増加傾向にあるこ
とが目まぐるしい。外国人労働者の
総数は172万4328人(厚生労働
省「外国人雇用状況の届出状況」20
20年10月末)であり、そのうち大阪
府は11万7596人です。単身で来日
する人々が多いが、家族で日本に定住
する人たちも増えていきます。その子ど
もたちは、日本語をもっと学びたいと
いう希望を持ちながらも、その機会を
行政機関などから十分には提供され
ていない場合が少なくありません」

特に、小学校の国語科に関しては、
ひらがなやカタカナ、漢字の読み書き
に苦労する子どもが多くいるという。

「日本語は、橋と箸、雲と蜘蛛など
の同音異義語が多く、語彙数を増やし
て文脈を理解するには、漢字を覚える
ことが欠かせません。漢字圏外の国の

増える外国ルーツの子…細る国語力

足元の課題を見据えよう

外国人であったり外国にルーツを
持つ人の子どもたちが、地域の学校
で増え始め、大阪市内では児童数の
4割を超えるという小学校がありま
す。そんな中、JAFSは、大阪市
西区区役所から「この区の校長先生
が、外国にルーツを持つ子どもの保
護者とのコミュニケーションがうま
くできず、困っているようです」と
の情報を聞きました。

JAFSは1989年から西区に
事務所を構えて33年。すでにJAF
S会員個人が各地域で、こうした課
題に対して活動し、幾人かはお住い
の地域で日本語サポートや交流活動
をしています。足元の地域の課題
に向き合っていないのではないかと、
とそのとき気づかれました。
JAFSはこれまで43年間にわた

ってアジアへ各国へ支援協力活動を展
開し、現地の人たちとの文化交流を通
じて、その地に根付いている慣習や宗
教的な考え方を理解しています。
それを今、生かすことが、JAFSの
役割の一つではないかと、と考えて日本
語サポート活動を始めました。

小学校での日本語サポートだけでな
く、外国人児童や保護者が日本の地域
社会に溶け込んで暮らしているよう
に、地域交流を活性化させていきま
す。互いの違いを理解し、尊重し合う
環境を提供し、支え合い、助け合いな
がら誰もが住み続けられる街づくり、
地域づくりに貢献していきます。

大阪市西区での多文化共生・日本語
サポート活動に関心がある方は、ぜひ
ご連絡下さい。共に活動しましょう!
(JAFS事務局坂口まで)

あなたも日本語を教えますませんか 先生夜を募っています

友情の花 支援オークション

ウクライナ難民が流入するポーランドで



横浜の版画家・澤岡泰子さん

①ウクライナからの難民を支援するため開かれた版画チャリティオークション
②会場で演奏する瀬田敦子さん=いずれも2022年9月17日、ポーランド、クラクフ

ロシアの侵攻でポーランドに逃れたウクライナの難民を支援する版画チャリティオークションと、阪神大震災の被災児童を招待して励ましてくれた関係者への感謝を込めた版画の展覧会・作品寄贈が2022年9月、ポーランドであった。版画を提供したのはリトグラフの版画家で横浜市在住の澤岡泰子さん。ウクライナ難民を支援するチャリティコンサートを開いたピアノニストの瀬田敦子さん（ポーランド在住、JAFS会員）も応援演奏した。100万円余りのオークションの収益は、ポーランドにいるウクライナ難民の支援に取り組む現地NGOに贈られる。（JAFS副会長 法花敏郎）

阪神大震災被災児童への励ましへ感謝の展覧会も

「さあ、買った。買った」。ポーランドのテレビに出演している白髪で丸顔、眼鏡をかけたコメディアン（威勢の良い声）が響いた。9月17日午後、南部の古都・クラクフにあるポーランド科学芸術アカデミーのホール。「記憶の風景」などと題された澤岡さんの作品がイーゼルに立てかけられると、会場からさかさず「2000ズウォオティ（6万2千円）」「3000ズウォオティ（9万3千円）」の声が飛んだ。オークションには現地の中小企業の経営者ら約80人が参加。澤岡さんの友人でスロバキアの国境に近い山間地でペンションを経営している三和昭子さんがクラクフのライオンズクラブに働きかけて実現した。澤岡さんは40年前から「木のリトグラフ」の版画を制作している。古来使われる石板ではなく、木の板を使う。油性の画材で木の板に絵を描き、時に彫りを入れて製版する日本独自の技法だ。オークションには大ぶりの作品（縦90cm、横40cm）4点と小ぶりの作品10点の計14点を提供。わずか1時間半で完売した。

瀬田敦子さんが応援演奏

続くピアノ演奏会では瀬田敦子さんが登場。最初にポーランド生まれのシ

ヨパンの「革命のエチュード」を力強く演奏した。19世紀初め、ロシア帝国の支配に抗議するポーランドの人民蜂起が弾圧されたことに怒り、悲しんで書き上げた、といわれている。日本の「浜辺の歌」や「城ヶ島の雨」も披露。迫力満点の「津軽じょんから節 JONKARA」（安達元彦作曲）にひととき大きな拍手がわき起こった。

近隣国に逃れたウクライナ難民の数はポーランドが最も多く、711万人（去年10月、時事通信調べ）。難民を支援するため、官民挙げてイベントが続けられている。大手スーパー、ピエドロンカは客が代金を支払う際に少額の寄付ができるシステムを導入。約2億3千万円を集めてポーランド赤十字社に寄付した。同社では学用品を詰めたりユックサク7万個を用意してウクライナ難民の子どもたちに配った。

オークションとは別に、澤岡さんはクラクフの東約20kmのニエポミウオミツェ市にある王宮博物館に屏風、掛け軸各2点を含む澤岡さんの版画67点を寄贈。これらを展示する個展が9月18日から同博物館で始まった。もとは君主の狩や静養に使われた古いお城だったが、第2次世界大戦中に兵舎として使われたために爆撃を受けて廃墟に。20年がかりで復元された。ここでもオークションに瀬田敦子さんが駆けつけて古い石造りの部屋でピアノ演奏。百席が満員になった。



このリトグラフ展は当初、遠くシベリアの流刑地に送られて死亡したポーランド人の孤児を日本が受け入れた1920年から100年に当たる2020年に記念行事としてワルシャワで行われる予定だった。コロナ禍で開催のめどが立たなくなったとき、澤岡さんの夫（83）の古い友人のスタニスワフ・フィリベックさん（元在日本ポーランド大使館参事官）の尽力で場所を変更することで実現した。フィリベックさんは1940年、ワルシャワ生まれ。第2次大戦下の44年8月、ナチスドイツに抵抗して市民が立ち上がった「ワルシャワ蜂起」の最

初の日母、兄弟とともにクラクフに避難した。当時3歳。その後、クラクフ鉱業大学修士課程を修了。ワルシャワ工科大学、ポーランド科学アカデミー物理化学研究所に勤務し、同時にワルシャワ大学日本語学科を終了。75年、ユネスコの奨学金で来日。澤岡さんの夫が勤務していた東京工業大学の研究室に配属された。以来、家族ぐるみの付き合いが続いている。

日・ポ間100年の積み重ね

ポーランドは欧州有数の親日国だ。ロシア革命から3年後の20年に日本がシベリアで親を亡くしたポーランド人孤児を受け入れたことはよく知られている。当時、日本からは7万人がシベリアに出兵していた。

19世紀から20世紀初頭にかけて15万〜20万人のポーランド人が、ロシアによってシベリアに流刑にされた。17年、ロシア革命が起きると、ソビエト軍（赤軍）と反革命軍（白軍）がシベリア各地で戦った。それに巻き込まれた多くのポーランド人は家も財産も失って餓死、凍死、病死者が続出。「せめて孤児だけでも救ってほしい」との願いを日本が受け入れた。日本赤十字社が窓口になって計765人のポーランドの孤児たちがウラジオストクから福井県敦賀港に上陸。粗末な衣服にやせ細った青白い顔の弱々しい姿だった。孤児たちはその後、東京、大阪の

病院などで手厚い看護を受けて元気になった。母国に帰る船に乗るとき、孤児たちは「日本に残りたい」と涙を流した——そんな100年前の物語（和楽Web 2020年5月21日号「100年前のシベリアからの救出劇・辻明人」より）が、日本とポーランドの友好を深めた背景にある。

フィリベックさんはポーランド大使館参事官として東京で働いていた1995年、阪神大震災に遭遇。がれきの中で子どもたちが困っていることを知った。「75年前、ポーランドの孤児を日本が受け入れてくれたお返しに今度は日本の被災児童をポーランドに招いて励まそう」。そんな思いから資金調達のために「日本ポーランド親善委員会」を設立して会長に。北海道・士幌町と姉妹都市のニエポミウオミツェ市の協力を得て95年に同町、96年には5つの都市が加わって、計60人の被災児童を3週間受け入れた。96年のお別れのパーティには高齢となった元孤児のポーランド人4人が駆けつけた。日本の被災児童たちを励まし、平和の象徴であるバラの花を一輪ずつ贈った。震災から10年後の2005年にもこのうち成長した10人の児童が招かれてポーランドを再訪している。澤岡さんのリトグラフ展は当初、阪神大震災の被災児童受け入れに対する返礼として企画された。その後、多くのウクライナ難民がポーランドに逃れ

できたことからウクライナ難民支援の意味も込めて展示会を開き、版画のオークションも行った、という。
スタニスワフ・フィリペックさんの話 素晴らしい芸術作品をありがとう

ウクライナ難民へ多くの皆さんから寄付

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が続き、2022年11月9日現在、関西では大阪に146人、兵庫に100人、京都には60人と、関東に次いで多くのウクライナからの避難民がいます。JAFSは、ウクライナの人たちに日本を選んで良かったと少しでも思っていたら、共に平和を願い、行動ができればと考えています。

JAFSでは、大阪市西区の事務所周辺に住んでいるウクライナの方々との交流を持ったことを機に、その方々や避難民の気持ちに少しでも寄り添うことができればと、会員に支援を呼びかけてきました。

それに応えて、堺市の家原寺からお米120kgをいただき、2kgの小分けにして渡しました。ウクライナの主食は米ではありませんが、ピラフにして食べる機会も多いと、喜んでもらえました。賛同してくれた美容院からは50本近いシャンプーを提供いただきました。個人の方々から鍋・フライパンなどの日用品をいただきました。

ございます。100年前、ポーランドの孤児たちにとって敦賀港は「地獄から楽園への門」でした。ポーランドにやってきた阪神大震災の被災児童たちもきっと忘れられない休暇を過ごした

ことでしょう。これまでのさまざまなイベントは王宮博物館に寄贈された澤岡泰子コレクションの名の通り「感謝、記憶、友情の花」の花束だと思えます。



ウクライナ避難民を支援している在日ウクライナ人のイリーナ・ステツェンコさん(左)と加藤カテリーナさん

寄付金からはボディソープとハンドソープを購入し、大阪国際交流センターで開催されたウクライナ人コミュニティ交流会で参加者に配りました。直接顔を合わせることができなくても、多くの日本の友が共にあることを感じただけだということです。
JAFSは今後も支援や交流活動をしていきたいと思っています。

ウクライナの方々から多くの喜びの声をいただき、いろいろな要望を聞いています。その一つを紹介いたします。
ノボチコリウドミラさん(68) 私は5月に来日しました。日本では行政も民間の人たちもたくさんサポートをしてくださり、とても素晴らしい気持ちをもってくださる人が多いという印象です。共に避難した孫の一人は障

がいをもっていて、その子が普通校に通って学べるようにサポートしてくれたいのは自国ではないことです。この点の手厚さには驚きと感謝でした。
JAFSの支援は、娘のカテリーナ 写真右側を通して聞いています。皆さまのあたたかいお気持ちに感謝しています。自国とは違う食べ物で苦労することも多いですが、わがままを言うことはバチが当たると思っています。
ただ、今とても心配なのは母国の友だちです。今日(12月始め)の気温はマイナス5度前後です。これからマイナス20度に向けて更に低下してきます。電気供給が数時間のみ、または停電しているので、病院への電気供給が優先され、電気がない中で生活を強いられています。発電機やカイロ、温かい下着などを送ることができないかと思いを馳せています。でも多くの人たちのための物資を個人で送ることはできないので、助けてくださる方が居ればと願っている毎日です。
(JAFSスタッフ 熱田典子)

防寒着・防寒下着の提供と輸送ご支援を

防寒着・防寒下着を扱う企業さま、物品の提供とウクライナへの輸送を支援くださいませんか。
(JAFS事務局 熱田まで)



小学校に衛生的なトイレを

④トイレを清潔に保つことの大切さや衛生的な使い方先生から教わる生徒たち ⑤現在の男子生徒用トイレ。水洗はなく、粗末な囲いがあるだけだ=いずれも2022年9月19日、バングラデシュ、ネトローコーナ県、ショワリカンダBDP小学校



バングラデシュ 緊急の10校にまず建設

衛生管理が行き届いたトイレが十分に整備されていないバングラデシュの小学校。コロナ禍で公衆衛生の重要性を改めて痛感した現地提携団体BDP (Basic Development Partners) から、老朽化したトイレを建て直し、子どもたちの衛生を守りたいと支援要請が来ました。JAFSはBDPと共に、トイレ再建と生徒への衛生意識啓発活動を始めました。BDPが運営する43校のうち、まず急いで対応する必要がある10校でトイレ建設と公衆衛生

意識向上プログラムができるよう、資金調達をしています。トイレ建設に必要な費用は1校あたり10万円ですが、まだ3校分の費用が足りません。子どもたちが安心して安全な学校生活を送れるよう、衛生設備整備へのご支援をお願いします。

トイレが故障している、ドアがない、タンクにゴミがたまり虫が湧いている。そんなトイレを使っているバングラデシュの子どもたちは、度々体調不良を起こしています。不衛生な環境

バングラデシュ・トイレ建設 ご寄付のお願い

- ◆銀行口座 三菱UFJ銀行 中之島支店、普通 1007011 公益社団法人アジア協会アジア友の会
- ◆郵便振替 口座番号00960-6-10835、アジア協会アジア友の会

そこで、手洗いやうがい指導をするだけでなく、衛生設備を整備することが、子どもたちの公衆衛生意識・知識の向上につながっていくと考え、トイレ建設事業が始まりました。
衛生教育活動の先駆けとして、生徒に4種類の衛生教材を配り、学校内でよく見える場所に衛生啓発ポスターを掲示し、トイレを清潔に保つことの大切さを教える授業をしました。トイレが汚れていたり不衛生な場合、どのような病気にかかるリスクがあるのか、なぜトイレ使用後に水を流すのか、またトイレ使用後に「石けんを用いた手洗い」をすることを教えました。先生の問いかけに対し、真剣に考える生徒たち。非常に単純な取り組みですが、とても重要なことです。

保護者には、校内に掲示したポスターを来校時に見てもらい、安全なトイレ使用について、共に意識し、理解を深めてもらいました。衛生教材は家に持ち帰ることができると、生徒には、親や友達にも自分が学んだことを伝えて、安心で安全なトイレの衛生的な使い方を広めるよう呼びかけました。衛生教育をした後は、先生が生徒の家を定期的に訪問し、学校で教えたことが実践されているかを確認するようになっています。3カ月ごとに手洗いを指導を繰り返し、フォローアップをしていく予定です。

(JAFSスタッフ 坂口優)

クーデターのミャンマー民主化へ連帯を

講師：ナンミヤケーカイン（京都精華大学国際文化学部グローバルスタディーズ学科特任准教授）

JAFSの セミナーから

第4期アジア市民大学第4回



人口5100万人のミャンマーは、中央の平地とそれを取り巻く山地で形成された多民族国家です。インドや中国、バングラデシュといった人口の多い国々と隣接し、インド洋への玄関としての地政的な特徴も持っています。「軍事クーデター以降のミャンマー国内外の情勢と連帯」という今回のテーマに沿い、まず、ミャンマーの1988年のクーデターと今回の2021年のクーデターを比較してみます。

88年は、大学生と地元有力者の息子の口論が社会主義体制批判につながり、民衆を巻き込んだ大規模デモへと発展。これを鎮圧するという形で始まったクーデターでした。暴徒化した民主化運動を統治するためと言いつけることができませんでした。

しかし、21年は、選挙結果に不満を持った軍が起したクーデターでした。平穏な日々の中で起きたもので、「クーデターではない。副大統領（元

軍人）が全権を軍の総司令官に委譲した」との軍の主張は無理があります。国際社会やミャンマーの人々も、クーデターであると認識しています。

加えて、大きく異なるのはミャンマーの経済的側面です。88年は国有企業が主力でしたが、21年は国外の多数の民間企業が活動していました。クーデターは経済に負の影響を与え、ミャンマーの通貨チャットは暴落しました。今回はメディア関係者が不当に逮捕され、民家で正当な理由なしに取り締まりが行われ、避難民は100万人を超えたとされています。ミャンマーに

関する報道はロシアのウクライナ侵略に隠れ、減っていますが、多くの地域で軍による人権侵害が続いています。軍事政権に対し、選挙に当選した議員による連邦議会代表者委員会が設立され、国民統一政府が樹立されました。医療従事者などによる不服従運動や街頭デモ、学生の授業のボイコットによる抗議活動が行われました。IT世代の若者が情報網を通じて国内外をつなぐ支援の輪が形成されつつあります。これも88年と大きく違う点です。

日本の方々は、ミャンマーで起きていることを関心持つて見聞きし、正しい情報を得て周囲の人に伝えてほしい、街頭でパンフレットを配っている人たちを見かけたら、エールの言葉をかけてあげてほしいと願っています。

◆発表後の受講者との質疑応答

Q：在ミャンマー日本企業は？

A：21年まで400社ほどが活動していたが、現在は3割ほど撤退。残った7割も、補償などのコストの面で撤退しきれないのではないかと。通貨暴落

3本の柱で 困窮者支援

経済危機のスリランカ

オンライン
会議で報告

第4回AFSオンライン会議が2022年10月1日、日本を含む10カ国から57人が参加して開かれ、経済危機に見舞われているスリランカから、サルボダヤのヴィニヤ・アリヤラトネ氏が、困窮する人々を支援する新しい

活動を始めたことを報告した。

この活動は、経済危機とコロナ禍の影響が深刻な地域の妊婦や乳児、小学生、病人や高齢者のいる50万世帯を目標にして、食料確保に重点を置く。22年4月から1年間の予定で始め、次の3つを柱にしている。

1. コミュニティキッチン 幼稚園や地域のセンターで安全で健康的で経済的な食事を定期的に提供する。

2. フードバンク 食料を誰もが寄付でき、誰もが必要ときに受け取れる仕

組みを作り、ロスや廃棄を減らす。いざれ小規模の生産者と直接つながるネットワークをつくる。

3. ホームガーデニング 家庭と地域で菜園を作って安全で新鮮な野菜を確保し、コミュニティキッチンと連携。子どもたちも、植物や食料、環境について学べる。まず600カ所を始め、2015年以降に公的債務が増え、通貨

報告に先立ち、コロンボ大学のM・ガネシヤモシー博士が基調講演し、2015年以降に公的債務が増え、通貨

が企業にもミャンマー従業員にも大きな傷を残した。

Q：ミャンマー国内の政治経済は？
A：クーデターとコロナ禍で、縫製業・農業に打撃が大きい。格安の麻葉が流通して治安が悪化している。

最後に講師は、ミャンマー市民に対する早急な支援の必要性を示し、無理のない範囲で募金の呼び掛けに賛同して欲しいと訴えた。



講義をまとめると、事実上の行政を担う軍は「尊敬される軍」を目指しながらも、現実には相反する行動をとり続けており、深く傷ついた民衆との信頼の回復は絶望的ともいえる。ウクライナでの軍事衝突、中国をめぐる東アジア地域での不穏な政治情勢、コロナ禍のダメージを回復しきれない経済。こうした国際社会の不安定な情勢が、クーデターによる国内の混乱の回復を遅らせるとも講師は述べた。

国内と国際の両面からピンチに立たされているのがミャンマーの現状であり、文民統治による安心して暮らせる政治社会体制への道筋をなかなか見いだせないことがいっそう不安をかき立てている。講師が言うように、今ほどミャンマー市民への支援が求められている日はないのかもしれない。

2022年10月22日に開講（まとめ）アジア市民大学講師
・元国際医療福祉大学講師 實一穂

が下落した▽厳しい輸入規制によって原材料と石油が入手できなくなり、輸出も減少▽政府は債務不履行を発表してIMF（国際通貨基金）に支援を求めたが、まだ合意に至っていない、などの経過と現状を説明。「物価上昇と増税の二重の打撃を受けて生活水準は大幅に低下し、人口の40%が十分な食料を得られていない。貧困層が急増し、食事なしで学校に通う子が増えている」と国民の窮状を訴えた。

（JAFSスタッフ 岡本佳子）

鉛筆とノート売って環境を保全

ネパールで新活動スタート



coffee + copy = COPPEE

「COPPEE」は「coffee」と「copy」を合わせた造語です。ネパールで環境保全を考え、新しい活動「COPPEE 活動」を2022年6月から始めました。

まず鉛筆。自閉症の人が経済的に自立し、総運動能力を向上させるために作っています。これまで障がいのある人が仕事を得ることは大変難しく、自閉症を理解する人が少ないことも課題でした。自閉症への理解促進と意識改善につなげます。

次にノート。100%再生紙で作りました。使用後もゴミとして捨てるのではなく、生まれ変わりを生徒に実感させ、リサイクルを習慣化することを

目指しています。これまで試験が終わると学校の周りにノートが捨てられることが多かったのですが、それをストップするためにも有効と考えています。これらを私たち支援団体がチャリティ販売することにより、利益を次の2つに使うことも目標としています。

1. 低カーストの少数民族への理解を促し、文具が買えないために学校に行かない子らに支援の手を差し延べ、教育を受ける権利を保障する。
 2. 地域環境保全と収入につながる新しい農業として、良質なコーヒーを育てる方法を伝授。取っ掛かりをつくる農家にコーヒー苗を配り、100年持つ木を育てる。
- AFSネパールは、農村で環境に対する関心を高めることが重要と考え、学校と共同で環境プログラムや環境活



でも理解者を増やして多くの人の意識を変え、次のステップに進める国に一助になればと期待しています。COPPEEのInstagramにぜひ登録ください。

（AFSネパール
レシナ・バジュラチャルヤ）

※ノート1冊と鉛筆1本をセットでチャリティ頒布します。300円。ご希望の方はJAFS事務局・熱田まで。

最優秀賞にスワーさん(ミヤンマー)



5カ国13人の留学生が競う JAFS 第3回日本語スピーチコンテスト

JAFS主催の「第3回日本語スピーチコンテスト」が2022年10月16日、大阪市天王寺区のクレオ大阪中央で開かれ、ミャンマーからの留学生、アウン・キョー・スワーさん(大阪日本語教育センター在学・19歳)が最優秀賞に選ばれました。

日本語を母語としない国・地域からの留学生(大学・専門学校・日本語学校)を対象で、今回はベトナム4人、ミャンマー、バングラデシュ各3人、タイ2人、ネパール1人の計5カ国から13人が参加しました。「日本に来て

いろいろな「大丈夫です」

最優秀賞 アウン・キョー・スワーさん

「君、元気ないね。大丈夫？」
「あ、はい大丈夫。ちょっと眠いだけです」
「ねえ、金曜の夜あいてる？」
「うん、大丈夫」

日本語スピーチコンテストの各賞受賞者。右から奨励賞のホアン・ティ・チュエンさん、最優秀賞のアウン・キョー・スワーさん、優秀賞のヤミン・ティリ・キッさん。2022年10月15日、クレオ大阪中央

思ったこと、感じたこと」などをテーマに、日本人がなかなか気づかない日本の良さやおかしいことなどを、ユーモアを交えて話し、①内容 ②表現力 ③日本語力を審査ポイントにして競ってもらいました。

このほか、優秀賞にヤミン・ティリ・キッさん(ミャンマー・大阪日本語教育センター・18歳)、奨励賞にホアン・ティ・チュエンさん(ベトナム・大阪YMCA国際専門学校・24歳)、観客賞には最優秀賞受賞のアウン・キョー・スワーさんが選ばれました。

最優秀賞に選ばれたアウン・キョー・スワーさんのスピーチの全内容、および、優秀賞、奨励賞受賞スピーチの概要を紹介します。
(JAFSスタッフ 柿島裕)

「このいす、座ってもいいですか？」
「あ、はいどうぞ。大丈夫です」
「あの、袋どうされますか？」
「あ、いや大丈夫です」

この「大丈夫」という言葉は、ただ3つの漢字からなっていますが、使える場面はたくさんあります。状態を説明するときや、自分の都合を言いたい

つと気づいて、もつともつと使つてほしいなと思います。

でより良い世界を築くことができると思う。

仲間と連携する 大切さを学んだ

優秀賞概要

ヤミン・ティリ・キッさん

日本に来たとき、飛行機内で財布を紛失して辛かったが、一緒に来た仲間助けられて乗り越えることができた。このことから仲間と連携すること、チームの大切さを学んだ。

人類は、助け合う集団の力のおかげで進化してきたとも言える存在であり、集団同士が対立せず助け合うこと

高い日本語力で ひたむきに発表

審査委員長 實 清隆

講評

第3回スピーチコンテストは、依然、コロナが終息しない中、前回と同様、13人も多数の参加者のもと開催された。発表時間は一人わずか5分。この短いスピーチに主張を盛り込もうとそれぞれ、懸命の努力と工夫が込められていた。

今回の審査で、感じたのは、発表者の日本語のレベルが、これまでと比べ、上達していたことである。特に、

認めてもらえた 私の小さな勇氣

奨励賞概要

ホアン・ティ・チュエンさん

勇氣を持って、拾った財布を交番に届けたことから、落とし主の男性に感謝された。「今まで外国人は悪い人しかいないと思っていたが、今回のことで考え方が変わった」と言われた。自分の勇氣ある行動が、一人の日本人の外国人に対する考えるきっかけになったことをうれしく思う。

入賞者たちの日本語力・表現力は優れていた。最優秀賞のアウン・キョー・スワーさんは、日本での生活体験を、コンビニでのエピソードをユーモアたっぷりに語った。優秀賞のヤミン・ティリ・キッさんは「立場を超えて」考える大切さの経験を訴え、語っていたのが印象的であった。奨励賞のホアン・ティ・チュエンさんは、落とし物の交番での対応について、笑いを誘うユーモアを交えて語った。

今回の評価ポイントは、短いスピーチにいかにもメリハリを入れるのが決め手となった。参加者全員、ひたむきな発表の姿に好感が持てた。

とき、他人に許可するときや何かを断りたいときまで幅広く使える言葉です。この言葉は、日本に留学する上で知っておくべきだと私は思います。それは、何年も日本語を勉強していたとしても、この言葉をうまく使えないと、日本語が上手だとは言えないからです。

私は今年(2022年)の4月12日に日本に来ました。大阪日本語教育センターで日本語を勉強しています。実は去年、日本に来るつもりでしたが、新型コロナウイルスのための入国制限によって入国できず、オンラインで授業を受けました。

オンラインで授業を受けるのは初めてでした。そのため、いろいろ問題がありました。先生たちが優しくて、ゆっくり教えてくれたから、1年後、私は自分の日本語に自信を持つようになりました。授業でいつも先生たちと日本語で話していたから、自分は日本語が上手に話せるんだと思ってしまいました。

でも、それは日本に来るまでだけでした。私は、日本に着いて実際に日本人と会話するのを楽しみにしていました。道を歩いているときも日本人に会ったら、「こんにちは。今日、いい天気ですね」と話しかけていました。今から思えばちょっと変な人だったかもしれません。

そして、日本で初めて一人でコンビニ

ニへ行きました。コーヒーを買おうとして、レジで日本人の若いお姉さんを見かけました。せっかくだし、話してみようと私は考えました。そして、レジの前に立つと、私は「袋どうされますか」と聞かれました。

私はとつさに返事ができず、彼女の顔をじつと見ました。だって、教科書でこの質問の答えを習った覚えはないからです。でも、自分の心の中で大丈夫、大丈夫、私ならできると思いながら「あの…、え…、袋は必要なものではないです」と答えてしまいました。彼女にクスッと笑われて、自分が実は日本語が下手だと思いました。

そこで、次の日先生に聞き、大丈夫という言葉の使い方を知りました。あのとき、自分で自分に大丈夫と言っていた言葉が、まさにその質問の答えだったんです。なんてことだ。バカみたいじゃないかと思いました。

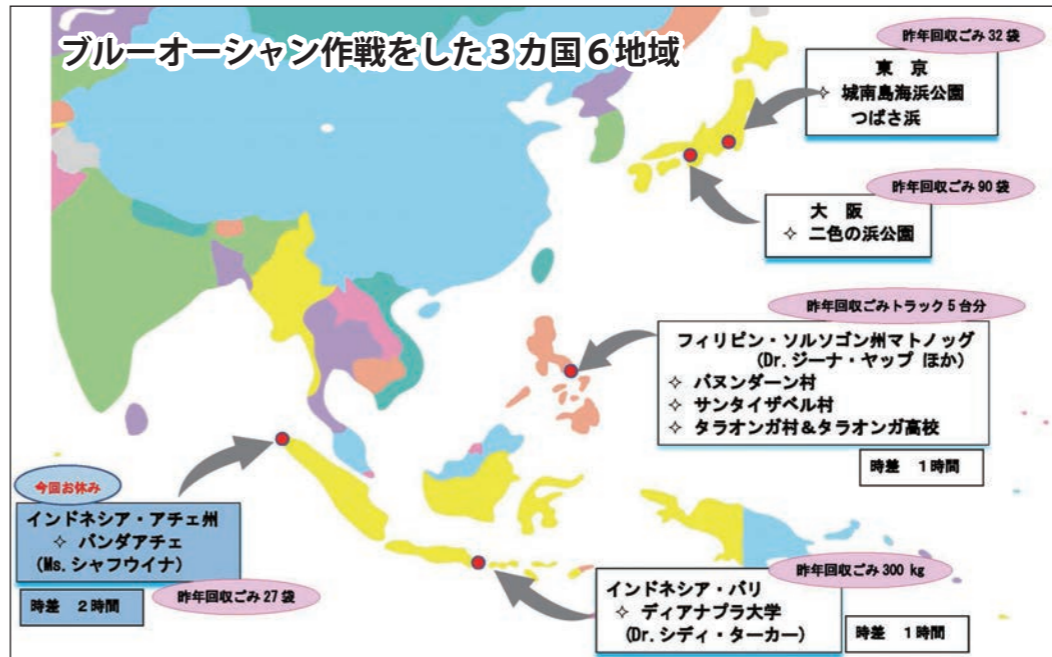
そのことから、私は大丈夫という言葉が好きになりました。この言葉を知っているだけで、いろいろな会話もできて自分の日本語が上手になったように感じられるからです。それだけでなく、何かで困っているときや緊張しているときにも、この大丈夫という言葉は自分の力になってくれるのです。私もこのスピーチの前に自分に「大丈夫。私ならできる」と何回も言い聞かせました。皆さんも今からこの大丈夫という言葉のおもしろさ、便利さにも

プラスチックみ拾い、2年目も連帯

3カ国6地域でブルーオーシャン作戦

世界の海に流出するプラスチックごみの8割以上がアジアからと言われる「海洋プラスチックごみ問題」に対し、JAFSがアジアに広がるネットワークを生かして取り組んでいる「ブルーオーシャン作戦」。2年目の2022年は「日本とアジアをつなぐビーチクリーン」と題し、11月19日に日本の大阪と東京、フィリ

ピンのソルソゴン州マトノグ周辺3村、インドネシアのバリ島の計3カ国6地域で、海辺などのごみ拾いをしました。ごみ拾いの後は地域の学校やビーチに集まり、互いの活動の様子を、動画や写真を使ってオンラインで紹介し合いました。各地から届いた報告を紹介します。



フィリピン・サンタイザベル村



大阪・二色の浜公園



インドネシア・バリ島



東京・城南島海浜公園

大阪・二色の浜公園 (貝塚市)

子どもからシニアまで約140人が参加。ペットボトルの減量に取り組む企業の参加も多くありました。晴天続きで、川による陸上ごみの流出や海岸漂着が少なかったことや、潮はごみがこれまでより少なく、砂に埋もれる小さなプラスチック片をコツコツと拾い集めました。並行して、子ども向けに、プラスチック片を入れて作る万華鏡工作も行い、そのために一層熱心に拾い集める姿もありました。少なかったとはいえ、大きなごみも6袋分。ペットボトルや食品包装プラ、空き缶、タバコ吸殻、マスクなど回収しました。

(JAFSスタッフ 川本裕子)

東京・城南島海浜公園 (太田区)

50人以上が参加。小さなお子さんからシニア世代まで様々な方と共に、海洋ゴミへの関心を高めることができ、大変意義を感じています。高校生や大学生も参加しました。海洋ゴミ問題を

授業やインターネットで知るだけでなく、実状を見ることにより、多くの「気づき」があったようです。さらに海外の仲間と情報を共有することで、日本だけの問題ではなく、同じ海に面した国はもろろん、海の恵みを頂く地球市民の問題であると、リアルに感じていただけたと思います。

当日回収したのはプラごみ4袋、燃えるごみ4袋、マイクログラスチックは中サイズのバケツ1杯程度とそれほど多くはありませんでしたが、マイクログラはザルでふるいながら探す作業のため根気がいる作業となりました。(JAFS関東・JAFS理事 端無勝)

フィリピン・ソルソゴン州 (3村)

ルソン島南端の3つの村の浜辺で、計500人以上が参加しました。小学校や高校にも呼びかけ、行政の協力も得られました。子どもたちが地域の実態を体験したことが、学校での環境教育の基盤となり、子どもたちからごみへの適正な意識が根付いていくことを期待します。参加者は自分たちの浜辺がきれいになって喜んでいました。活動を通して、学校や地域にリーダーシップも育まれています。

オンライン交流に参加した人は、日本やインドネシアも一緒に活動していたことを知って驚き、本当に忘れられない体験となりました。(AFSソルソゴン ジーナ・ヤップ)

インドネシア・バリ島

従来ごみ拾いをしていないマングローブ林がG20開催で立入禁止のため、大学近くの水田で、大学生と周辺の小学生の計約50人が活動しました。とても悲しかったです。米作用の水路にプラスチックを捨てる無責任な人がたくさんいるので

るのです。約300kgを回収しました。私たちは当分の間、ごみ拾い場所をマングローブ林から田に移して農民を助けることに決めました。

私たちは、水田周辺の小学生たちが、今後も活動に大きな協力をしてくれるよう、小学校で環境教育をすることも計画しています。オンライン交流会は、学生にも刺激になりました。この活動が続くことを願っています。(AFSディアナプラ大学 シディ・ターカー)



オンライン交流で手を振るサンタイザベル村の小学生たち

ごみを拾った後、各国・地域の参加者がオンライン画面越しに手を振り合うだけでも、心が通じたと感じられました。互いの活動を知り、国を超えて同じ目的に向かう仲間がいると実感できましたと思います。フィリピンから「どうして日本のビーチはそんなにきれいなのか」と質問がありました。日本では自治体のごみ処理システムが整っているなど違いもありますが、「日本人の多くはポイ捨てをしない」という答えが、画面の向こうに集まっていた人々の心に伝わっていると良いと思います。(JAFSスタッフ 川本裕子)

◇次の各社・各団体にご協力いただきました。共催：「ステハジ」プロジェクト／後援：大阪府、(株)OSGコーポレーション、(株)ウォーターネット／協賛：象印マホービン(株)、タイガー魔法瓶(株)、ビーコック魔法瓶工業(株)、(株)DESIGN WORKS ANCIENT、(株)acc、(株)アカカベ、(株)Fast Fitness Japan、D4L、八尾トヨー、大松、ニシムラ、クワタ、奈良O.Aシステム

村人が井戸をしっかりと管理

この村は工業地帯のすぐ近くのため、川や池は工業廃水に汚染されており、浅井戸の水はヒ素に汚染されています。そのため安全な飲み水を得ることがとても難しいです。今回設置されたこの深井戸により、小学校に通う子どもたちはもちろん村人たちも、安全な飲み水に容易にアクセスできるようになりました。村人たちはこの井戸の維持管理のための責任機関となる委員会を設立しました。この委員会によって、井戸と敷地内はしっかりと管理されています。



【寄贈者】株式会社ユニコーン様

ガジプール県サマルシンBDP小学校内
 受益者：125世帯300人
 井戸の形式：ポンプ式（深さ290m）

【寄贈者】株式会社グローアップ様

池・川も雨もない地に井戸

ジャマルプール県ダルカマルプル地区ドウムルトラBDP小学校内 受益者：100世帯120人
 井戸の形式：ポンプ式（深さ274m）



この村は辺境にあり、電気や水道などのライフラインは全くありません。丘陵地帯であり、池も運河もない上に、季節性の雨が降ることもないため、水はとても希少です。支援いただいた井戸により、安全な飲み水を必要とする人々が、一年中容易に水を得られるようになりました。雨の心配や、遠い水源まで水くみに行く必要がなくなりました。汚れた水が原因の病気が減り、とても喜んでます。井戸の維持管理は、村人で行われています。

工業廃水汚染のない水で安心

この村の川や池は工業廃水に汚染されており、安全な飲み水ではありません。村人たちは雨水を集めるか、道中危険のある遠く離れた村にある深井戸まで水をくみに行っていました。ご支援により村に井戸が設置されてから、人々は、いつ雨が降ってくれるのか心配することや、遠く離れた水源に安全な飲み水をくみに行く必要がなくなりました。この新しい深井戸により、水系の病気による健康被害やリスクが減少したことに、村の人々は非常に喜んでます。



【寄贈者】湯川剛様

ガジプール県バシユガオンBDP小学校内
 受益者：87世帯435人
 井戸の形式：ポンプ式（深さ288m）

ご寄付には
 税の優遇措置が
 受けられます

いのち 生命の水 うるおす未来

井戸の寄贈にご協力ください。あなたの力がアジアの人々の命を助けます。ご寄贈者に完成報告書、写真、パネル写真を届け、現地の井戸に、ご寄贈者のネームプレートを設置します。

■井戸1基の建設に必要な費用■（2018年4月現在）

インド=60万円 フィリピン=33万円
 カンボジア=28万円 スリランカ=22万円
 ネパール=17万円（パイプライン=25～150万円）
 バングラデシュ=浅井戸22万円、深井戸55万円

※5年間のメンテナンス費、現地管理費を含む概算です。※現地資材費高騰により費用を1割増に変更させていただきます。ご理解ご協力をお願いいたします。

■お振込み先■ ・郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会
 ・三菱UFJ銀行大阪中央支店 普通1968711 公益社団法人アジア協会アジア友の会

詳しくはアジア協会アジア友の会
 06-6444-0587へ

安全で衛生的な水を確保できないアジアの地域に井戸ができて生活基盤が整い、自立へ一歩踏み出せるようになりました。ご寄贈くださったみなさまに感謝申し上げます。

みなさんのおかげで 井戸ができた村

安全な水がいつでも手に入る

この村の周辺には水を得られる運河や池がありません。県内には川がありますが、モンスーンの時期だけ水が豊富で、他の時期は水位が下がり、水が滞留しています。これまで村の人々は、大雨が降った際は川や池から飲み水をくんでいましたが、不衛生な水で、病気になるリスクがありました。今、この新しいポンプ式深井戸が近場に設置され、隣村や遠方の村へ水をくみに行く必要がなく、安全な水がいつでも手に入るようになりました。心から感謝しています。



【寄贈者】藤原登志子様

ジャマルプール県コラダップ地区ジョカBDP小学校内 受益者：75世帯375人
 井戸の形式：ポンプ式（深さ273m）

【寄贈者】坪内かず代様



ジャマルプール県バスチャーラ地区バスチャーラBDP小学校内
 受益者：150世帯700人 井戸の形式：ポンプ式（深さ276m）

遠方への水くみ不要に

この地域の人々は、飲み水を得るために雨水を集めたり、きれいな水を求めて、地下水をくみ上げられる深井戸がある隣の村まで行ったりしていました。しかし、それらは村から遠く、道中も安全ではありませんでした。ご支援により村にこの深井戸ができてから、バスチャーラBDP小学校に通う生徒たちも村の人々も、水が原因の感染症による健康被害や病気にかかる機会が減り、雨の心配をすることも、遠方の村まで安全な飲み水をくみに行く必要もなくなりました。

衛生的な水で感染予防

この村には井戸がなかったため、村から遠い池から、飲み水のほか、炊事・洗濯・水浴び・家畜用の水を全て得ていました。不衛生な水なので、煮沸して使っていましたが、水が原因で病気になる人が数多くいました。寄贈いただいた井戸により安全な水を村の中で得られるようになり、女性や小さな子どもたちを危険にさらさずに生活できることは大きな安心です。新型コロナウイルスの感染が都心部から農村部に広がった時も、衛生的な水で感染予防を実践できるようになりました。



【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

タケオ州トレアン郡ロネナム地区トラペアン・ク
レイ村 受益者：9世帯40人
井戸形式：露天式（深さ21m）

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様



タケオ州トレアン郡ロネナム地区ソフィ村
受益者：10世帯44人井戸の形式：露天式（深さ24m）

清掃し譲り合って利用

井戸が完成するまで、村には安全で十分な水が得られる井戸がなく、約1km離れた池まで、水くみに行かなければなりません。安全とは言えない道りを、手押し車や自転車または徒歩で、毎日水くみに通っていました。この度、井戸が寄贈され、安全な水を村の中で得られるようになり、とても喜ばれています。村人たちは皆が気持ちよく井戸を利用できるよう、炊事・洗濯・水浴びなどで井戸を使った後は清掃に努め、混む時間帯にも譲り合って利用しています。

井戸水で野菜・家畜も育つ

この度、井戸を寄贈いただいたことにより、家の近くで安全な水を使うことができるようになり、村人たちはとても喜んでいました。現金収入が少ないため安全なミネラルウォーターを買うこともできず、不衛生な池の水によって引き起こされた疾患からも、水くみの重労働からも解放され、村人たちの生活は大きく改善されました。コロナ禍で村から出稼ぎに出ることができない時期でも、井戸の水を飲み、豊富な水で野菜や家畜を育てて暮らすことができました。



【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

タケオ州トレアン郡ロネナム地区トラペアン・ク
レイ村 受益者：9世帯47人
井戸形式：露天式（深さ24m）

【寄贈者】湯川 剛様



タケオ州トレアン郡クバブ地区サモールクロム村
受益者：9世帯35人 井戸の形式：露天式（深さ28m）

家の近くで炊事・洗濯

村には安全で十分な水が得られる井戸がなく、村人は約1.2km以上離れた池まで水くみに行っていました。その池には動物も訪れるため飲用には適さず、また生活に必要な十分な水を得るのもとても難しいことでした。井戸をご寄贈いただき、毎日、安全な水を使えるようになり、安心して水を飲み、家の近くで炊事や洗濯ができるようになりました。政府から指導があった感染症対策が、衛生的な水で実施できるようになったことは、村人の大きな安心につながっています。

【寄贈者】イオングループ労働組合連合会様

タケオ州トレアン郡ロネナム地区トラペアン・ク
ノル村 受益者：9世帯28人
井戸の形式：露天式（深さ22m）



女性や子どもが水くみから解放

井戸が完成するまで、村人は約1km離れた池まで水くみに行かなければなりませんでしたが、道は舗装されておらず、水タンクを持って移動するのは、とても大変でした。女性や子どもが水くみを担うことが多く、一日の中で多くの時間を費やさなければなりません。飲料用ミネラルウォーターも販売されていますが、経済的に購入できません。この度、井戸ができ、毎日、安全な水を使えることにより、感染症等の心配もなく水を飲み、暮らせるようになりました。

【寄贈者】OSGコーポレーション 青樹会様



タケオ州トレアン郡クバブ地区サモールクロム村
受益者：8世帯26人
井戸の形式：露天式（深さ28m）

安全な水で生活改善

井戸ができるまで、村では安全な水が十分には得られませんでした。この度、イオングループ労働組合連合会の皆様に井戸をご寄贈いただいたことにより、安全な水を村の中で得られるようになり、飲料水の他にも炊事・洗濯・水浴び・家畜の飼育・野菜の植付けにも水が使えるようになり、生活環境が大きく改善されました。新型コロナウイルスの感染が都心部から農村部に広がることもありますが、井戸ができてからは安全な水で感染予防を実践することができるようになりました。

人から水をもらわずに済む

今まで水をもらいに行く日々を送っていた私たちに、ご支援で井戸が設置され、暮らしに大きな光が差し込みました。水は生活に欠かせないのですが、水をもらいに行く毎日は精神的に辛いものがありました。遠慮なく水が使えることをつくづくありがたく思っています。他の村人たちと決して仲が悪いわけではありませんが、水位が低くなると、水をくむ時には遠慮しました。しかし、これからはそのような辛い気持ちにならずとも良くなりました。心より感謝申し上げます。



【寄贈者】エーゼル株式会社様

ガンダキプラーデッシュ州ナワルプル郡ゴイリガウン・ナヤバステイ 受益者：4世帯20人
井戸の形式：手押しポンプ式（深さ6m）

【寄贈者】湯川 剛様

東部州アンパーラ県マハワラ村
受益者：105世帯270人と近隣農民300人
井戸形式：露天式（深さ8m）



井戸の周りに子どもたちが植林

飲用に適する水が得られなかった村に井戸が寄贈され、村人皆がとても喜んでいました。長年、安全な水が飲める井戸を待ち望んでいた村人、特に水くみの担い手であった女性や子どもたちが、建設にとっても協力してくれました。また子どもたちが中心になって、井戸の周りに、水を保持し浄化する力のある木々の植林も始めました。木々を育てることによって、緑多い土地をよみがえらせ、井戸の水を枯らさず、また、土砂崩れなどの自然災害からも村を守ってくれます。

【寄贈者】JSNA様

バグマティ州シンドウパルチョーク郡ボテシバ村
受益者：6世帯
井戸の形式：水道パイプライン・水場6カ所



家に水場がやってきた

私たちの集落の各世帯に水道の設置が決まった時は、踊り出すくらいにうれしかったです。水を得るために長年苦勞してきましたが、これからは自分たちの家で水が出るようになったのです。夢のような現実が、私たちの日常にやってきたのです。つい先日まで息子の嫁は、私たちが畑に出ているので乳児の孫を背負って水くみに行っており、どこかで転ばないかと心配していました。しかし、そのような心配もなくなりました。水道は私たちの生活に劇的な変化をもたらしてくれました。

井戸から始まる衛生教育

今まで、安全な水とは言えない遠くの水源地まで水くみに行くのは、大変な重労働でした。この度、井戸をご支援いただき、村の中で安全な水が得られるようになり、村人皆がとても喜んでいました。新型コロナウイルスの感染もまだ不安な日々ですが、村では井戸ができたことをきっかけに衛生教育や感染予防の講習がおこなわれ、安全な井戸水によって感染予防の実践が可能になりました。井戸のおかげで、村で暮らす人々の生活が大きく改善されました。心より感謝申し上げます。

【寄贈者】OSGコーポレーション 青樹会様

サバラガムワ州ラトナプラ県タリカヌワ、カッワマダマ村 受益者：25世帯110人と近隣農民60人
井戸の形式：露天式（深さ8m）



水質管理される水で安心

水を得るために長年苦勞をしてきましたが、水道が設置され、これからは自分たちの家で水が出るようになりました。本当にうれしいことです。きれいな水が得られなかった頃は、子どもたちが頻りに下痢をしていましたが、これからは水質の管理もされるため、安心して水を飲むことができます。水道料金を払う必要がありますが、これまでできなかった野菜作りや家畜の飼育ができ、生活向上にこの水が大いに役立ちます。ご支援誠にありがとうございました。



【寄贈者】東代清隆様

バグマティ州シンドウパルチョーク郡ボテシバ村
受益者：6世帯
井戸の形式：水道パイプライン・水場6カ所

【寄贈者】湯川 剛様

ヌエバエシハ州カラングラン町ジェネラルルナ村
受益者：35世帯80人
井戸形式：ポンプ式（深さ30m）



水くみに苦勞いらず

年間通じて雨量が少なく、水を得るのがとても難しい地域です。村には深さ18mの古い井戸がありました。これが村に唯一の井戸だったため、必要とする水量を確保することは難しいものの、村人は朝4時から井戸に並び、1回に約4Lの水しかくめないので何往復もして水を得ていました。泥だらけの道を、自身の体重と抱えている水の重さを支えながら運ぶのは、至難の業でした。井戸の完成で、もう長い距離を歩かなくても安全な水を得ることができるようになりました。



国内外のさまざまなイベントをHPに載せています。記事についてのお問い合わせはJAFSへ。裏表紙にアドレス、連絡先



音楽でネパールと日本を橋渡し

コロナ禍で何度も延びていた「JAFSネパールへのかけ橋（ネパ橋）」20周年＆ネパールチャリティーCD「MAYALAND」リリース記念コンサートを2022年9月23日、大阪府高槻市のネパール料理店ASANで開くことができました。写真：ネパールのバンドKUTUMBAが動画でジョイント演奏し、民族楽器、サックス、ピアノを合わせたハーモニーから、ネパールと日本の友好を音楽で感じる時間を、会場の皆さまと共に過ごすことができました。

当日サックスを演奏した清水利香さんから「ネパール現地報告やKUTUMBAとの動画ジョイント演奏という試みは、これからの活動と交流への新しい取り組みへと導いてくれました。いろいろな思いで胸が熱くなりました。ネパールの素晴らしい音楽を一人でも多くの方に届けたい。そんなネパールと日本の橋渡しになるコラボレーションアルバムです」とメッセージをいただきました。

ネパ橋が20年間活動を続けることができた喜びを皆さんと共有したいと思い、記念のメッセージ集を作成しました。皆さんの思いや体験、感じたことなどが書かれ、ネパ橋の軌跡です。貴重な財産です。20年の節目として、皆さんの記憶に留めてもらうとともに、更なる躍進につなげたいと思います。ご関心ある方はご覧いただけますのでお知らせください。CDのチャリティー販売にもご協力いただきたいです（<https://wq5q7hp.peraichi.com/nepahash-cd04>）。ネパールの子どもの幸せを願って活動しているネパ橋に、ご協力よろしくお願いたします。

（JAFSネパールへのかけ橋代表 岡田光浩）



10月16日、大阪府交野市で、JAFS応援団の（一社）ドリアンプランニングが主催した「マナリ村ステージ&バザール」。草木の茂る山の斜面を利用したステージ、イノシシが掘り起こした地面をユンボで整地しての出店と、何事も初めての試みでした。バンド演奏、ネパールの踊り、童謡唱歌、カラオケ、ポピュラーソングを歌う方々。楽しい演目が続き=写真=、国道168号線沿いということもあり、通りがかりの人や子どもさんたちも加わり、にぎやかに楽しい一日を過ごしました。皆さんの楽しそうな顔を見ていると、準備の疲れも吹っ飛びました。（JAFS理事・岡山日生地区会会長 鳥居 建十）

自然の山で歌とバザール

加してカンボジアに贈った井戸の写真などを展示しました。懐かしい方が見えてくれる方もいて、参加団体同士の交流もありと、有意義な1日でした。

11月20日には、コロナ禍で経営が難しくなっているインドのコスモニケータン学園支援のために、インドカレー懇談会を開きました。日印コスモニケータン支援会の大本和子さんが学園の現状を話し、写真、学園理事長のサチダナンド・H・クンパールさんが、現地のさとうきび栽培などについて報告しました。さとうきびを栽培で持続可能な資金を確保できるとのこと、クンパールさんの熱い思いを感じました。

当日は4人のインドの方も参加し、インドカレーとチャイを食べながら和やかな交流会となりました。

（JAFS高槻会長 伊藤 エリサ）

遊ぶように譜面に向かう室内楽

京都市の洛南教会で11月12日、フルート吉川澄江さん、バイオリン大日方章代さん、ピアノ力石文子さんのユニット「アンサンブルYUFU」を招いて室内楽コンサートを開催しました。写真。43人が参加しました。

エルガー作曲「愛のあいさつ」など、どこかで聞いたことのある身近な曲を演奏していただき、豊かな音色に圧倒されました。窓から入る暖かい日差しの中、楽器の柔らかい円熟した音色に包まれて、来場者は和やかな午後のひとときを過ごすことができました。



た。室内楽を間近に聴くのはなかなか贅沢なことです。「YUFU」はフランス語？何かの頭文字？いえ、「遊譜」なのだそう。

パダトラ小学校と生理小屋に取り組み

国内最大級の国際協力イベント「グローバルフェスタJAPAN」が10月1・2両日、東京国際フォーラムで開かれ、JAFS関東は、里子を支援しているインド、マハラシュトラ州のパダトラ小学校と、その地域の人たちの暮らし、部族の風習として残る生理小屋の問題などを、ビデオを交えて紹介しました。

遊ぶように楽しく楽譜に向かおうという意味。その通り楽しく、心を解き放つくれるコンサートでした。今回のご協力はインドとフィリピンの子どもの教育支援に充てさせていただきます。

（京都地区世話人 福井 えり）



ブースに写真に100人以上が訪れ、生理小屋に特に関心が集まりました。「インドにこんな問題が残っているなんて」「今、アフリカの村に布ナプキンを贈ろうと取り組んでいて、勇気づけられます」との声。女性たちが声をあげていけるように取り組む姿勢に、多くの方が共感してくれました。

JAFS関東は、今後もセミナーなどを通じ、この問題に取り組みます。興味のある方は、公式LINEアカウント（<https://line/GDjXy7y>）への登録を。

（JAFS関東代表 川崎 隆二）

コスモニケタン支援インドカレー懇談会

大阪府高槻市立生涯学習センターで9月11日、第18回たつきNPO協働フェスタが開かれ、JAFS高槻も参

野生動物、育む森と脅かすゴミ



①青々と葉を茂らせた大木が育った「朝日読者の森」
②樹間では養蜂などの新しい試みが進んでいる＝いずれもネパール、チトワン国立公園付近。裏表紙にも写真

11月初旬、ネパール南部のインド国境に近いチトワン国立公園付近。野生のサイが森の脇の堀に気持ち良さそうに漬かっています。ここは、以前は森ができるなど想像できない草原でした。「朝日読者の森」チトワンサイトでは、地域環境づくりと農業収入に結びつけようと、現地の人たちと日本からのJAFSボランティアが協力して植林に取り組みしました。

森の管理担当、ビスマ・B・マガルさん（61）からまず告げられたのが「一人でうろろしないてくださいね。どんな動物が隠れているかわからないから」。木と木の間に草が高く茂っています。村人が収穫が終わるまで刈りに来ないので、伸び放題なのです。ここにもサイが居るのはもちろん、数カ月前には、村人がトラに連れ去られて大騒動になったそうです。乾季になって森に餌が少なくなり、人家近くに出てくるのです。それほど野生動物が生息できる森に成長しています。

森の一角では、研修を兼ねて、樹間で家畜・農作物を飼育・栽培しています。パイヤヤマンゴーなどの果樹が茂り、その花で養蜂をしています。管理をするサイ・ラマさん（64）は「始めて20年以上になり、この地を木

朝日読者の森 朝日新聞大阪販売局がネパール、フィリピンで取り組んだ森づくり。植林をJAFSに委託。販売店、読者からも募金を呼びかけ、第一弾のネパールでは2001年度から5年間、首都・カトマンズ近郊の山間地カルパ村とインド国境に近いチトワン国立公園近くの2カ所で実施した。々が守ってくれています。丈が高くなりすぎて維持管理しにくいのが少し難点ですが」と、成長した木をうれしそうに眺めながら話してくれました。

ただ近年、大きな問題が起き始めました。森の動物が突然死ぬのです。原因はプラスチックごみ。近くに行政が許可したゴミ捨て場ができ、街のゴミが集められます。分別されていないために、食べられるゴミと一緒に食べてしまうのです。ビスマさんは何度も現状を行政に訴えています。他の場所の選定が難しく、聞き入れてもらえていないそうです。私たちがいる間も、カラスやシラサギがゴミ山をつついでいました。

リサイクルできるゴミを集める親子連れもいました。「せめてゴミで遊ぶのはやめて」と、思わず声をかけました。危険な場所を何とかできないものか、しっかりと育った森を横目に複雑な思いが残りました。 〓おわり (JAFSスタッフ 熱田典子)

した所で海水が蒸発してできたので、プラが含まれているわけではないのは確かです。

と思いながら見ていると、隣には「ヒマラヤ岩塩(ブラックソルト)」と書かれた別のボトルがあります。モンゴル岩塩は白色ですが、ヒマラヤ岩塩はピンク色です。ピンク色の岩塩はこれまでも見かけたことがあります。『ブラックソルト』ってどういうこと?と思いながら、ピンク色の岩塩をサラダにかけてみました。口に運ぶと、ぶ〜んと硫黄っぽい匂いがし、口に入れると、ゆで卵のような味。そして時間が経つと、塩の色が黒っぽくなってきました。やはり硫黄成分が入っている?後で調べると、大昔に陸上で岩塩ができる際、火山の影響で硫黄が含まれたのだそうです。

そもそも今まであまり気にしていませんでしたが、岩塩のピンク色の正体は何?何の成分に由来するの?と調べてみると、想像通り鉄分でした。

塩にも色々ありますね。いわゆる「塩」の主成分である塩化ナトリウム以外にも、様々なミネラルが含まれているのが塩の美味しさ、とよく言われますが、未知も含め不純物を気にするのなら、究極は精製塩に行き着くのかも、と思いました。

海の塩にプラスチックが混じる事態は言語道断ですが、塩から様々なバランスを考えた秋の日でした。(JAFSスタッフ 川本 裕子)

環境コラム
塩に思う秋の日

心地よい秋の日、近所のファラフェル屋さんでランチをしました。ファラフェルは、ひよこ豆で作ったミートボールのようなもの。そのほかババガヌシュ(なすペースト)などを薄いパンに挟んだサンドイッチが中心のイスラエル料理の店です。ふとテーブル上の塩に目をやると、ラベルに手書きで「モンゴル岩塩」と書いてある下に「海洋プラスチック汚染の無い安全な岩塩を使用しています」と書かれています。お、こんなところにも海洋プラスチック汚染の波が来ている、と、とても興味深くしばし塩のボトルを眺めました。

メニューで分かる通り、ヴィーガン(完全菜食主義)のお店です。そんな健康や安全・環境を強く意識するお店だからなのでしょう。

海水から作る塩に、海中のマイクロプラスチックが混じる事例が見つかることは知っていましたが、私は家で今まで通り海の塩を使っています。混じっていたとしても微量で、海水を直接口にする海中の生き物に比べて、水陸の色々なものを食べる人間にとっては大きな影響がある程ではないと思うからです。現在、日本製の塩の90%以上は、海水をろ過した後、イオン交換膜透析によって100万分の1mm程の孔を通す精製法で作られるので、マイクロプラは除去されるはずという点もあります。ただ岩塩なら、大昔に海底が隆起

冬季募金お願いいたします

旧年中は様々なご支援をいただき、ありがとうございました。新年を迎え皆様のご多幸をお祈りいたします。アジアの人々も新たな年に希望を持って暮らせるよう「冬季募金」へもご協力いただきましたら幸いです。



冬季募金クレジット決済

編集後記

地球運命共同体が揺らいだ一年が逝く。ウクライナ侵略のロシアと欧米の角逐。イランではヒジャブ着用を巡る女性の死に抗議の波。温暖化防止も先進国と途上国の協調は遠く。対立が憎悪に転じぬよう祈る年の瀬。(督)

仲間と「子ども食堂」を月1回開催している。開催の前週末チラシを配って参加を呼びかける。本心は貧困家庭の子どもを対象にしたいが、そういう呼びかけはできない。裕福そうな親子の参加も多く心境は複雑。(和)

ハッブル望遠鏡の後継機ジェームズ・ウェッブ望遠鏡から届いた画像には、空の果てまでを埋める無数の銀河がくつきり。ビッグバン膨張宇宙の定説を覆すかもしれないか。人のちっぽけさを思い知らされます。(黒)

昨年は結局ウクライナもミャンマーも問題は解決することなく新しい年を迎えた。激動の時代に為すべきことはないのかと無力感を覚えつつも、世界は市民一人ひとりの力でも変わると信じて今年も歩んでいきたい。(裕)

取材時、現地爆撃の報道がさされた時、現地の味に変わった。宇宙も露も一般人は心穏やかに正月を迎えることを願っているに違いない。今年の平和を願う。(典)

入会・寄付ご案内

会員となって継続的に支援くださることで、安定した活動計画ができます。ご協力を願います。

- A. 維持会費 年額1口 12,000円 (月額1,000円)
- B. 賛助会費 年額1口 6,000円 (月額600円=振込手数料含む)
- C. ジュニア会費 (高校生まで) 年額1口 1,000円
- D. 団体会費 年額1口 20,000円
- E. 法人賛助会費 年額1口 50,000円

会費・寄付の振り込み先

三菱UFJ銀行中之島支店 普通1007011 または 楽天銀行リズム支店(209) 普通7006892 【口座名 シャ)アジア協会アジア友の会】



募金にご協力をお願いします

アジアの安全な飲料水がない地域で
貧困に苦しむ人たちを支援する活動に使われます

郵便振替 00960-6-10835 アジア協会アジア友の会

編集・発行：公益社団法人 アジア協会アジア友の会

〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-2-14 肥後橋官報ビル5階
☎ 06-6444-0587 FAX 06-6444-0581 E-mail asia@jafs.or.jp
URL: <https://jafs.or.jp> Facebook: <https://www.facebook.com/JAFS.NGO/>

2023年1月 152号 発行人：篠原勝弘 編集人：村上公彦
広報企画委員長：法花敏郎
編集アドバイザー：松本 督、黒沢雅善
編集スタッフ：熱田典子、大本和子、柿島 裕、金井英夫
川本裕子

印刷製本：あさひ高速印刷株式会社



Accountability Self Check 2012



HPもご覧ください

植林から20年を経て緑が育った森には、野生動物が現れるようになった。堀の水に漬かるサイ⇨2022年11月、ネパール、チトワン国立公園付近。30ページに記事

◀表紙の写真 日本に住む外国人の子どもに日本語を教える「日本語サポート」活動を始めた。講師が黒板に書いた数字を、生徒が日本語で読み上げる⇨大阪市の西区の小学校。4〜6ページに特集記事